

編集後記

令和元年の最も嬉しいニュースは、ラグビーワールドカップにおける日本の活躍です。4年前のイギリス大会以上に人々を熱狂させ、ラグビー人気を一気に上昇させた功績は大きく、国民にラグビーに対する親近感を持たせてくれました。大学時代にラグビーをやっていた小生としても誇らしく、頼もしく思います。

9月28日のアイルランド戦は世界に衝撃を与えました。開幕前は世界ランキング1位（対戦時2位）のアイルランドを、19対12で破ったのです。前半20分に2本目のトライをとられ、3対12とリードされるものの、素晴らしいタックルで追加点を許さず、日本のユニフォームを着た5万人の観客の後押しもあって、前半を9対12で折り返しました。

後半は徐々に日本のペースとなり、18分敵陣でのスクラムからバックスが仕掛けてウィングの福岡堅樹がトライを挙げ逆転に成功しました。彼は医者を目指しています。トライはこの1本でしたが、日本の優勢は続き19対12でノーサイドになりました。国籍、人種は異なってもワンチームという言葉が流行させた大会でもありました。

さて、今回の紀要は、総説、原著、症例、留学報告の4編が掲載されています。まず細谷亮中央市民病院院長の総説から始まります。平成30年に泌尿器科以外の術式にも保険適用されるとの予測のもと、その前年ロボット手術センターが開設されました。その立ち上げ、運営と

経営的側面について概説され、実績と課題、さらに将来展望まで言及されています。次に、中央市民の婦人科から今後増加が予測される家族性・遺伝性腫瘍の相談外来の立ち上げに関する原著、西市民病院の臨床検査技術部からの貴重な症例報告、そして西市民病院の呼吸器内科から長崎大学への国内留学の報告と続きます。どれも興味深い内容で、いわゆる医学雑誌ではなかなか掲載されない内容となっていますので、ふとこの紀要を手にとられたなら是非目を通して戴きたいです。

最後に、本誌の編集から発刊までご尽力いただいている、法人本部の企画財務課の皆様には感謝いたします。アイルランド戦で試合に最も貢献した選手に贈られるプレイヤー・オブ・ザ・マッチにはフッカー（スクラムの先頭の真ん中）の堀江翔太（ドレッドヘアの奇抜な髪形）でした。フロントロー（スクラムの先頭の3人）はラグビーでは縁の下の力持ち的な役割で、トライどころかボールにも触れないことの多いポジションです。法人本部の皆様にはプレイヤー・オブ・ザ・キョウを差し上げたいと思います。

神戸市立医療センター中央市民病院 泌尿器科

川喜田睦司